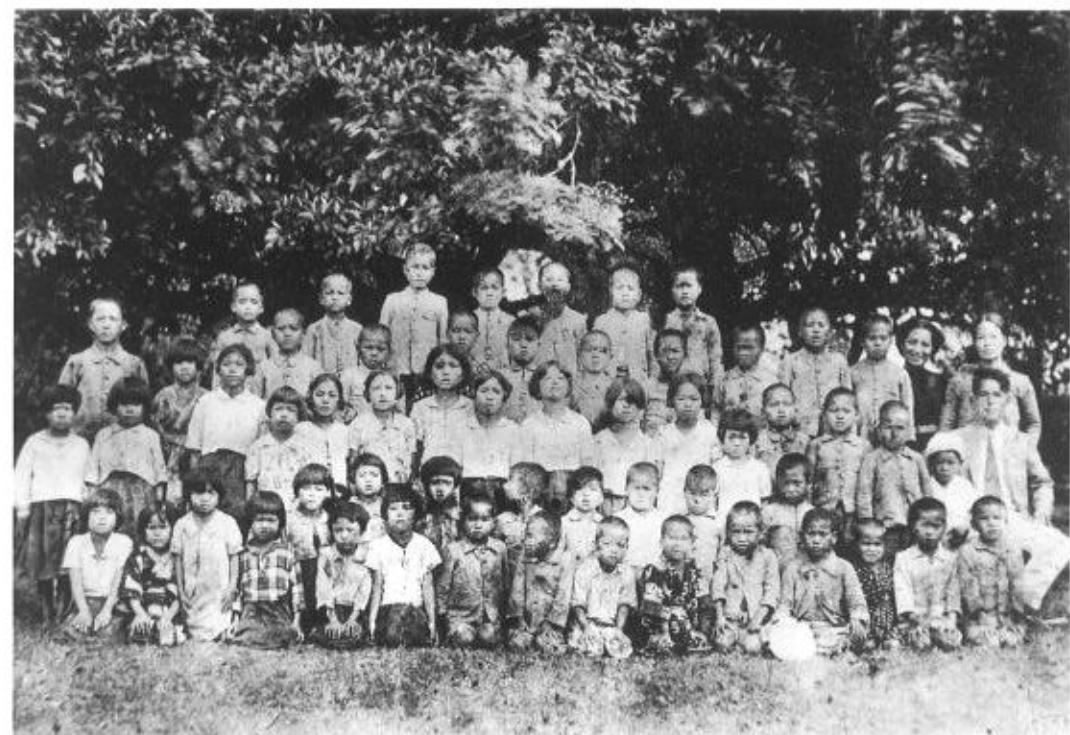


町民参加の町史づくり



1996.9.30(月)

第10号



竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

TEL・FAX兼用 (09808) 2-9985

目 次

竹富町史第十一巻資料編「新聞集成Ⅲ」発刊へ
「沖縄県統計書」を購入
沖縄県地域史協議会総会
△戦さ場の実相
青空学校と避難生活
外離島での軍作業と空襲
挺身隊としての辛い体験
△写真に見るわが町
漁民の村
△新聞で知る町の今昔
国立南風見診療所
△戦跡をたずねて
国吉家の機銃弾跡
△聖地めぐり
南神山御嶽
△文化財探訪
下田原城跡
収蔵図書紹介
業務日誌
編集後記

•表紙の写真•

新城島には1896年（明治29年）6月に大川尋常小学校新城分校として創立した学校があった。1907年（同40年）には新城尋常小学校として独立、1941年（昭和16年）に新城国民学校と改称されるまで続いた。写真は1940年（同15年）頃のもの。学校沿革誌によると、同年、児童数は102人だった。学校は1975年（同50年）に廃校になった。

☆題字 大城正明

竹富町史第十一卷資料編「新聞集成Ⅲ」発刊へ

—昭和九年から二十年までの記事を集録—

既刊の新聞集成 I、II

竹富町史編集室（安里碩八室長）では、平成八年度に、竹富町史第十一巻資料編「新聞集成Ⅲ」の発刊を計画しています。同書は「新聞集成Ⅰ、Ⅱ」に次ぐもので

総量八百ページを見込んでいます。取り扱う新聞は「琉球新報」「沖縄日報」「八重山新報」「八重山民報」「先島朝日新聞」「海南時報」の六紙で、収録記事は竹富町に関係する主要記事一千百五十四件を盛り込む予定です。

「新聞集成Ⅰ」は、明治三十一年四月から大正七年五月までの「琉球新報」、明治四十二年三月から大正三年十二月までの「沖縄毎日新聞」「新聞集成Ⅱ」は、大正六年七月から昭和八年十一月までの八重山の郷土紙を取り扱い編集しました。記事を読むと往時の政治、経済などがよく分かります。

い順から編年体で配列します。取り扱う年代は「新聞集成II」に続く、昭和九年から二十年までの時期です。

この時期は満洲事変が勃発した後で軍国主義が台頭し、軍部が发言力を強め、ついには太平洋戦争に突入する十五年戦争と重なり合います。紙面は特に太平洋戦争が始まった昭和十六年以降になると、戦争一色に塗り潰されます。住民の戦意高揚を図る記事が踊っています。武運長久、大政翼賛、報國、滅私奉公、銃後の護りなどの字句が見られます。



既刊の「新聞集成 I」「新聞集成 II」

縣に實地踏査を申請
博物學界の誇り
八重山に昆蟲の新種

「新聞集成Ⅲ」に収録する記事の原本コピー

「沖縄県統計書」を購入 —七十冊をマイクロ複製本—

福島県地域史協議会研修会

史編集室では今後、「前近代・近代編」「社会・産業編」、さらに島々編の発刊を計画しており、統計書を駆使して編集していく計画を立てている。

沖縄県地域史協議会（泉川良彦代表）の一九九六年度総会が五月三十一日、佐敷町シユガーホールで開かれた。議案は九六年度予算など六件。役員改選では五人の運営委員のうち二人に入れ替り、代表には仲原弘哲さん（今帰仁村文化センター）が新たに選出された。

『沖縄県統計書』は明治十三年、明治十六年から昭和十五年までの国勢調査、県統計などを収録したもの。『沖縄県史』第二〇巻に内容が抄録されている。県内各市町村史編集室や博物館、図書館などでは蔵書にして活用している。

収録の主な項目は土地、人口、財政、農業、畜産、林業、水産、金融など多方面にわたる。明治十三年の人口を見ると

総会では九五年度活動として「戦後選挙史」「八重山移民」「戦後五〇年関連展示会と戦後資料」をテーマにした、年三回の研修会を実施したとの報告があり、九六年度には九五年度と同様、年間三回の研修会を開くことが承認された。また継続して『近代辞令書調査報告』などの調査を行なうことも了承された。

四一人、波照間村六二三人、西表村五二九人、上原村二三四人、崎山村一八一人、南風見村二七人、仲間村一八人、古見村一三三人、高那村四六人。同書は政治、経済を知る不可欠の資料である。

マイクロコピー製本の「沖縄県統計書」

『戦さ場の実相』

島じまの語り部たち

青空学校と避難生活

嘉弥真慶吉

◆「御真影」と「教育勅語」

私は昭和十九年に国民学校に入学したが、当時は机や腰かけは各自で持つて行った。学校は一年生から六年生まで一組の複式学級で、担任は入伊泊清光先生だった。その頃、戦争はまだ激しくなく、戦争の様子はニュースなどで聞かされていた。

部落では当時、戦地に送り出される人たちがいた。嵩原徹さんや東若力三さんたちがそうで、その時、彼らは千人針を持って出征したが、今でもその光景が頭の中に残っている。

学校には「教育勅語」があり、天長節の時などには朗読があった。しかし「御真影」があつたかどうか、覚えていない。

「教育勅語」を読む時には頭を垂れているので、「御真影」が天皇の写真なのか、分からなかつた。
校長は「教育勅語」を「朕惟フニ我力皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲニシテ厥ノ美ヲ済セルハ此レ我カ国体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス」と朗讀したが、「御真影」は収納する場所がなかつたので多分、なかつたと思う。

私たちは「教育勅語」をしっかりと読まされたが、校長はどんな様子で朗讀しているのか、頭を垂れているので分からぬ。「教育勅語」はおそらく巻き物になつていたと考えられる。

生徒は全員、頭を垂れていたため、読んでいる光景を思い浮かべることができない。「教育勅語」とのかかわりにはこういう経験があつた。部落では、「御真影は天皇が馬に乗っている写真だ」とか、「天皇の上半身の写真が御真影だ」とか、いろいろ言われていた。

その当時は「氣をつけ、礼」という最

敬礼を重視する厳しい社会だった。目上の人の命令には絶対服従の世の中だった。国民学校は、というと学級では今と違つて落第があり、ひとつクラスに落第した生徒が机並べて一緒に勉強することもあつた。六年生になつても落第して卒業できずに、一年残つている生徒もいた。

◆竹槍訓練で士気高揚

私が何年生の時だったか忘れたが、運動会の時、運動場に米国のルーズベルト大統領、英國のチャーチル首相のワラ人形が立てられ、紅白に分かれて竹槍を持ち突き刺すという競技種目があった。これは軍国主義教育の一環だったと思う。

ワラ人形を突いた時、素早く抜かないといけないが、中にはすぐに抜くことができない人もいて、「やあっ」と大声を張り上げたものの、軽く突き刺して走る人もいた。竹槍訓練は辛いものだった。
学校に行くと、ニュースを聞かされたが、決ったようにいつも、「日本は〇〇戦で勝利した」というものばかりだった。

当時は現在のように情報機関が発達していない。情報源はラジオだけで、人々は情報をほとんど口伝えで入手していた。

しかし、それも軍部から操作された情報で、正しい内容かどうか分からなかつた。

網取に一度だけ海軍の船艇が入ってきたことがあつた。兵隊は白い帽子を被つてカッコいい姿だった。私たち学童は、これまで兵隊の写真を見ており、兵隊に惚れていた。子どもたちは「大きくなつたら水兵になりたい」という人がほとんどだつた。

「学校を卒業すると何になるか」と問われると、子どもたちは口を揃えて「水兵になる」と答え、海軍に入ることを決めていた。水兵は丸い帽子を被り、子供たちが惚れるような容姿をしていた。子供たちは軍国主義の教育を受け、軍国の少国民として成長していった。

◆船浮要塞の建設

私が一年生の時に那覇の街は米軍機の大空襲を受けた。昭和十九年一〇月一〇日のいわゆる一〇・一〇空襲だが、その

頃から戦争は激しくなってきた。米軍は

次第に沖縄に近寄って来ていた。終戦間ぎわの二年生の頃になると、親父などは軍作業に徴用された。

西表島西部には船浮要塞があり、要塞の内離島は三区、サバ崎は四区に組み入れられ、米軍との戦闘に備えていた。親父は三区で作業をしていて、私たち船浮や白浜、祖納に行くために四区の下方を通ることもあった。私たちが通ると、上方から兵隊が私たちを見て手を振つた。

網取の住民は戦争が激しくなった頃には毎日、舟を漕いで三区に防空壕掘りに徴用された。それは多分、軍の命令だつたと思う。当時はすでに空襲が始まつており、米軍機の機銃掃射があるため、住民は軍作業には早朝に出発し、作業を終えて夕方には村に帰つて來た。

内離島には小野隊が駐屯していて、防空壕掘りなど軍作業を指揮するとともに、陣地を固めていた。部隊は防空壕掘りに力を傾注していて、米軍機が飛来しても攻撃を加えようとはしなかつた。しかし、一度だけ米軍機に機銃を放ち、撃ち落と

したことがあつた。

偶然にも戦闘機の飛行士が終戦直後、西表島で伐採隊長を務めたマチウス大佐の弟ということだつた。飛行士は死んでし、船浮に埋葬された。米軍は戦闘機が撃ち落とされた後、友軍機がやられたということで、激しい仕返しを繰り返し空襲は一段と激化した。機銃掃射はあるし、爆弾は投下されるし、恐ろしい状態になつた。

◆部落の避難所と家屋焼失

私はその頃、部落から一キロほど離れたウブヌチに設けられた第二避難所にいた。そこには避難小屋があり、家族はそこで寝泊りしていた。部落には、この他第一避難所もあった。避難所は赤土を積み上げた簡易なものだつた。場所はウルチ字の間の丘で、そこには横穴を掘られた木材を組み立てた奥行き一〇メートルほどの坑道式の壕があつた。避難壕には三〇人ぐらい入れた。

空襲があると最初に逃げ込んだのは第一避難所だつた。避難所には部落の住民

全員が避難した。しかし、寝泊りすることはなかった。空襲警報が出ると真っ先に第一避難所に駆け込んだ。

避難所の壕内は大人から子供まで一杯だった。空襲を避けるため、壕内でじつとしていたが、子供が大声を出して泣き叫ぶこともあった。これに対して住民の中には、「子供を外に出せ。子供の泣き声で爆弾が落とされ、全員死んだらどうするのか」ときつく言う人も出てきた。子供の泣き声が米軍機に聞こえる、と真剣に思っていた。

今、考えると滑稽なことだが、当時は飛行機のことを全く知らないから無理はなかった。今では避難壕や避難小屋は残っていない。

私は第一避難所と第二避難所までは行つたが、第三避難所には行かなかつた。第三避難所はカサシタという場所に掘つ立て小屋を三棟造り、住民の避難場所に使つてゐる。第四避難所もあつたが、この避難所は崎山のずっと山奥に設けられ、網取と崎山の両部落の人々が使うようになつていて共同で建てたといわれる。

部落では空襲などの被害があり、焼失したのは私の家と南谷さん、村仲さんの家屋などだつた。南谷さんの家には缶詰などの食料があつたが、全部焼かれてしまつた。家屋は目の前で炎を上げて燃えていたが、どうすることもできなかつた。

当時は消防車があるわけではないし、燃えるのを消し止めるることは出来なかつた。あの頃、茅ぶきの家屋は屋根をアダントで被い、上空から家屋と分からぬよう偽装してあつた。部落は空襲を受け、多くの家屋には機銃掃射の跡が残つていた。

学校では戦争がそれほど激しくない頃まで授業をしたが、空襲警報が盛んに発せられるようになると、授業どころではなかつた。網取の東方にウチタバルといふ所があり、私たちは山の麓の田んぼの傍らの木陰に机や椅子、黒板も持つて行き、そこを青空教室にして勉強した。勉強した場所に避難小屋があつたかどうか覚えていない。少なくとも寝泊りした記

憶はない。

勉強は避難してやつたが、夜になると多分、自宅に帰ってきたと思う。私たちが勉強した場所の近くに大坪さんという人が、川の上流に家屋を建てて寝泊りしていた。

勉強は木陰の下に机を並べてやつたが、空襲の危険があるので、勉強に身が入らない。学習しているというより、机を前にただ椅子に座っているという感じだつた。

椅子は終戦後に二人掛けになつたが、当時はまだ一人掛けだつた。机や椅子は子供の身長に合わせて作るというものはなく、とにかく使うことができればよい、というものだつた。

子供の中には卒業した人のものを譲り受けた子もいたが、そのような机や椅子は子供がいたずらして、あちこちにキズがついていた。机や椅子を壊すと親は同じものを作らなければならなかつた。教科書は貸し借りして使つていた。現在のように改訂がなかつたので、先輩の教科書を譲り受けて勉強することができ

た。

網取の国民学校は新城さんの前通りに

面していたが、私は弟と学校の前の道路を歩いている時、米軍機の機銃掃射に遭った。米軍機は上空から弾丸をバラバラと撃ってきたので、二人は恐ろしくなり、地面にうつ伏せになつた。体を地べたにびたつと張り付けてじつとしていた。

米軍機はどこを狙っているのか分からなかつたが、とにかく伏せることにした。

攻撃目標は網取なのか、船浮なのかはつきりしなかつたが、機銃掃射は怖いものだつた。

網取には昭和二〇年に入つてから空襲があり、部落では焼失する家屋も出てきた。戦後になって焼け出された家族には、部落総出で家造り作業をして、住まいを建てて上げた。私の家はその頃、学校の近くに移つた。

網取は戦時中、三〇軒ほどしかなく機銃掃射はあつたが、爆弾は投下されなかつた。しかし、祖納には数多くの爆弾が落とされている。米軍は網取のような小さな集落も攻撃するくらいだから、空襲が

どれだけ徹底していたかを窺い知ることができる。

西表島の崎山の先端に道路があり、そこに敵軍の潜水艦を監視する見張り塔があった。川平永美さんは、そこに勤務していたようで、空襲警報が出ると網取までやつて来て、メガホンを手にして「警戒警報発令」と住民に伝え回つた。

住民への伝令は、昼夜を問わず空襲警報が出ると行われた。崎山から網取までは相当な距離があり、当時は部落に電話もなく、口頭でしか空襲警報を知らせる手段はなかつた。そういう状況での伝令だつたので、空襲警報を伝える仕事は辛く、川平さんは本当に苦労したと思う。

網取にはお米はあつたが、イモはあまりなかつた。野菜を特別に栽培していかつたので、食事はお米の他にエンサイやイモの葉、カボチャの花、それに海の

物や山の物を食材にした。避難生活では絶対に煙は出すな、と厳しく言われていた。煙を見て米軍機は機銃掃射を仕掛け来ることが分かつていていたからだ。食事のおにぎりは朝早く、空襲のない時間帯を見計らつて食べた。

部落には子供たちは一〇人ぐらいいたと思う。子供たちの日課は朝が早く、私は朝寝坊だったので、起きるのが遅いつもたたかれた。戦争が激しくない時、学校は午前八時三〇分に授業が始まった。

は蚊取線香もないのに、木の皮を剥ぎ取つて燃やし、蚊に刺されるのを防いだ。

避難所での食事は、お米やイモを持って行き、それを材料に料理を作つた。部落の男は戦争に出ていたため、部落には年寄りと婦女子、子供たちだけが残つていた。そのため避難する時は婦女子が中心になり、食事も全て女の手で作り、子供たちに与えた。

網取にはお米はあつたが、イモはあまりなかつた。野菜を特別に栽培していかつたので、食事はお米の他にエンサイやイモの葉、カボチャの花、それに海の物や山の物を食材にした。避難生活では絶対に煙は出すな、と厳しく言われていた。煙を見て米軍機は機銃掃射を仕掛け来ることが分かつていていたからだ。食事のおにぎりは朝早く、空襲のない時間帯を見計らつて食べた。

部落には子供たちは一〇人ぐらいいたと思う。子供たちの日課は朝が早く、私は朝寝坊だったので、起きるのが遅いつもたたかれた。戦争が激しくない時、学校は午前八時三〇分に授業が始まった。

空襲がそれほど厳しくない時には授業も

普通どおりにやっていたが、空襲が次第に激化し戦闘機が飛来すると、逃げ場所を見つけて隠れた。その時には授業は中断した。

子供たちは学校から帰って来ると近くのユウナの木に登って歌をうたったり、「悪漢探偵」をして遊んだ。弟は木の上で「つかまえ鬼」をして遊んでいる最中、木から落下して骨折してしまった。その後遺症は今でも残っている。

学校の生徒には半ズボンや靴の支給があつた。私が幼稚園生の時、小学生は靴をもらっていたが、私はまだ小学生になつていないので支給されず、泣いたことがあつた。これは昭和一七年頃のことである。今でも印象に残っている。

当時、生徒はほとんど裸足で靴を履くということはなかつた。靴はゴムひもの付いたもので、私は履けることを喜んでいた。靴を履いたのは冬の間だけで、夏に履いたのかは覚えていない。それに帽子はあつたか、どうか分からぬ。

◆終戦直後の生活難

戦争中はお米の生活だったが、戦後は食糧難で食べることに苦労した。戦争が終わると外地に出ていた人たちが復員してきた。そうなると部落の人口は増え、それに伴い食糧が不足してきた。戦争中はソテツを食べることはなかつたが、戦後は食べなければ暮らしていくことができなかつた。

お米は栽培していたが、空襲が激しくなると田んぼで作業する機会が少なくなり、稻の管理に手が行き届かず、自ずとお米の収穫量は減つた。私の家にはお米はあつたが、底をつきそうになつた。食糧難は深刻で、そのため当時米泥棒もあり、米倉から一俵の米がなくなつてゐることもあつた。

米がなくなると、今度はソテツを食べなければならなくなつた。部落の裏山にはソテツがたくさん生えており、それを収穫して食べた。ソテツを買う人がいた。男たちはソテツを切つて村に担ぎ、アルバイトとしてソテツを売つて金もうけをする人もいた。御嶽の東側にソテツが山

積みされている光景をよく見た。

部落の人たちはソテツを切り取る時、山を焼くこと也有つた。原野を焼き払うとソテツだけ残り、切り易くなつた。焼かれたソテツには煤が付着していて、切り取つたり、運ぶ時体につくと黒く汚れるため、山の崖から転がして下方に落として、それから麻袋に包んで運搬した。

切り取つたソテツは最初の頃には実を食べたが、実がなくなると今度は幹まで食べなくてはならなくなつた。ソテツを食べるには幹を削つて包み、青葉で被つて腐らせ発酵させ、杵でついて澱粉を沈殿させ、その後に食べることができた。作業の中で水を何度も変えなければならず、そうしないと中毒する危険性があつた。作業は根気強く続けた。

ソテツの実は澱粉だから美味しいが、幹は美味しいものではなかつた。食糧として山に生えているヘゴも取つて来て食べた。またパパイヤもあちこちに生えており、その実と根っこもよく食べた。当時もっとも多く食べたのはパパイヤの実だつた。

終戦は私が二年生の時だった。その時「日本は戦争に負けた。大変だ」ということで、「戦争に関するものは全部焼却せよ」ということになった。命令により各家では戦争に関係するものは全て焼き捨てた。

戦争が終わり外地から一人、二人と部落の人たちが島に帰って来た。戦争が終わって、ばあさんが芭蕉の繊維で織ったポケット付きの上着と長ズボンを作ってくれた。これは今でも鮮明に覚えている。

太平洋戦争が終って五〇年になるが、戦争は絶対にやるべきではない。戦争は人間を狂気にさせ、全てを破壊し尽くし、悲惨な状況を招く。「歴史は繰り返す」というが、最近、世界は段々とおかしくなつてきている。

日本は戦後になって民主主義教育を施したが、近年、その方向性が危うくなっているような感じがする。教育の力は怖いものだ。それは戦争中の教育をみればよく分かる。

(現住所) 石垣市字新川一五〇番地
(出身地) 網取
(当時) 八歳 国民学校
(採録)

◆仲里医師の手伝いさん

山城スミ
(旧姓・山田)

私は尋常小学校を卒業すると高等科には進まず、家事手伝いを続けていた。一、二歳頃、行くのを泣いて嫌がつたが、祖納にいた仲里朝貞医師の子供たちの子守りや、お使いをするために連れて行かれた。そこで仲里医師の家族と一緒に二年間ほど生活していたが、仲里医師は戦闘に巻き込まれるのを避けるため、家族ぐるみで台湾に疎開することになった。

その時、私は先生や奥様に台湾行きを勧められたが、「台湾には行きません。村に帰ります」と言って断った。先生は「あなたが行かないと困るのだが……」と言つて嘆いた。当時、竹富村から台湾に疎開した人は少なかつたが、仲里医師の家は戦争中ずっと空いていたので、家族は台湾に渡つたと思う。

先生の家族が台湾に行つたので、私は部落に戻つて来た。部落に帰ると、本土の軍需工場で働くことを勧められた。祖納の古見石人さんが来て、「網取からはあんた一人しかいない」と本土行きを薦した。

私は体が弱いので、「どうしようか」と悩んだが、「本土なら行く」と決心した。すると、ばあさんは「お前は体も弱いのでヤマトウに行くと、すぐに病気になる。行つたら駄目だ」と強硬に反対した。そのため行くことはできなかつた。あの頃、「ヤマトウに行けずに残念だ」と思ったが、振り返つてみると、もし本土に渡ついたら私は死んでいたのかも知れない。

◆家事労働と軍作業

私が部落に帰つて来た頃、八重山にはまだ米軍機による空襲はなかった。空襲が始まつたのは、私が帰つて来た一年後の昭和一九年で当時、十七歳だった。その頃、青年学校もあつたが、両親は早めに亡くなり、山田満慶じいさんとヒサばあさんと一緒に生活していたので、進学せずに農業をしたり、家事手伝いをしたりしていた。

部落では青年団に入り、豊年祭とか結願祭、種子取祭など、村の年中行事に参加し活動していた。青年団員は二十五人ほどいた。

西表島の西部には船浮要塞があり、軍隊が駐屯していた。要塞は一区から四区まであって、私たちは三区の外離島に渡り、弾薬の銷落としなどをさせられた。作業は防空壕の中で部落のおばさんたちと一緒に行つた。外離島での作業のない日は、崎山の監視所にも行つたことがあつた。

軍作業は奉仕作業であったが、部落からの命令だった。網取から外離島にはサ

バニを漕いで渡つた。船頭は男の人だつたが、時には私たち女性が務めた。私は船頭の経験があり、舟を漕いで網取から白浜まで行つたことがあつた。

網取から外離島に行くには荒波が碎けるサバ崎の沖合を通りなければならなかつた。海上がしけると、女性だけで外離島に行くのは大変だった。仕事を終えたものの、波が高いので網取への船が出せず、外離島に泊まつたこともあつた。宿泊の

時には軍は、私たちに壕の中の小さな兵舎を提供してくれた。その兵舎に一〇人余の人たちがまとまって寝た。

網取から外離島には、手漕ぎのサバニで行くため一時間以上かかった。軍作業は午前八時から始まつたので、網取からは周囲が薄暗いうちに出発しなければならなかつた。仕事は八時間から一〇時間ほど続けられたが、部落には太陽が西に沈んで辺りが暗くなつてから帰つて來た。

軍作業の女性は普通は七、八人だったが多い時には一二、三人ほどいた。作業する人は網取のほか、船浮からも来ていた。作業はモンペ姿の服装で行われたことであつた。

作業の中心だった弾薬の銷落としは、そんにきつい仕事ではなかつた。

弾薬は鉄箱に詰められていて、それを二人がかりで担いで、作業を行つた。しかし、作業はいくつか掘られている防空壕の中で行われたので空気が汚れ、喚気のよくない壕の中では悲惨だった。壕内では思い切り呼吸ができず、時々新鮮な空気を吸うため外に出なければならなかつた。

現場では全て軍の指揮命令のもとに作業が続けられた。不思議だったのは、銷落としされた弾薬が機銃掃射を繰り返す米軍機を撃ち落とすために一度も使用されたことがなかつたこと。作業は何のためにしたのか分からなかつた。山頂には大砲も据え付けられていたというが、見たことはなかつた。

作業は防空壕の中でやつているため米軍機に轟音が辺りに響いても壕内には聞こえず、ひたすら仕事に汗を流した。しかし、時には「米軍機が来ているから、仕事をやめて隠れなさい」と言われたこともあつた。

米軍機の空襲があった時、機銃があちこちに打ち込まれているのが見えた。海の方向から米軍機が火花を散らしながらやって来ることもあった。このような光



上空から見た内離島（後方）と外離島（手前）

的なものであり、賃金などはなかった。

働いた見返りとして一銭たりとも、賃金をもらつたことはなかった。軍作業は終戦になるまで続いたが、一週間に三、四回ほどあり、毎日あるわけではなかった。

作業には天気のよい日に出掛けたが、続けて五、六日間も行かない時もあった。

しかし、家事労働をしているより、軍作業をしている時間が長かった。軍作業は最も苦しかった。作業は時間通り進められたが、そんなに厳しくはなかった。作業に出掛ける時、イモのおにぎりと野菜チャンプルーの弁当を持参した。

◆米軍機の空襲

網取に空襲のある時だった。武男おじさんは護郷隊に召集されていて家にいなかつたので、私は満慶じいさんと二人で網取部落から奥に入ったウダラで田んぼの仕事をやっていた。私の家ではウダラに田んぼがあり、稻作をやっていた。

田んぼで満慶じいさんの手伝いをして景を見ると、「怖いなあ」と思ったが、何だか分からぬので、おもしろがることもあった。

軍作業は奉仕となっていたが、半強制

えはその岩陰に隠れなさい。そして飛行機がいなくなると、走って自分の家まで帰りなさい」と言われた。満慶じいさんは「自分は犬を連れて回るから」と言ったので、私は「はい」と答え、じいさんの言われるようとした。山の中には道らしい道もなかった。

米軍機は満慶じいさんが獵犬を連れて行つた後と同時にやって来た。機銃の弾丸がバラバラと上空から落ちるので、「空襲だな」と空を見上げていた。そうして、じいさんの言われた通りに急いで山に駆け登り、岩陰に息を殺してじっと隠れていた。その時、網取がやられているとは思わなかった。

私は機銃掃射が収まつたので山から下り来た。満慶じいさんも下りて來た。すると、部落の方面に煙が立ち込めているのが見えた。「大変だ。早く家に帰ったほうがいいじゃないか」と言うと、じいさんは田んぼの仕事を終えて、猪を担いで部落に戻った。

網取は空襲に見舞われていた。部落に戻ると、何軒かの家が燃えていて、部落

内は騒然としていた。部落内はあちこち煙だけで、私の家は燃えずに残つていて難を逃れた。焼失したのは嘉弥真、村仲などの家だった。それでも私の家には機銃が通り、柱には機銃の跡が随所に残っていた。その機銃跡は、戦後ずっと残つていた。

部落に戻ると、ヨシ子おばさんが家にいた。武男おじさんは護郷隊にいたが、稲刈りを手伝うため部落に来ていた。私の家は部落では最も広かつたので軍の荷物などが置かれていた。ヨシ子おばさんは空襲の時、機銃掃射の中を一人で家の中の重い全ての荷物を近くにある防空壕に担いで片付けた。

防空壕は部落の上に、ツルハシや鍬を使つての手作業で二ヵ所掘つてあつた。一ヵ所には食糧のお米など、いろいろな物を保管し、もう一ヵ所は空襲の時、逃げ込む避難場所として掘削した。防空壕の掘つた場所は軟らかい砂岩質でできていた。防空壕の周辺には硬い岩はあまりなかった。

部落に戻るとヨシ子おばさんは、「荷

物を運ぶのに大変だったよ」と苦勞話をした。私は、「家の中に人がいたら大変なことだった」と思いを巡らしていたが、幸いなことに家の中にはだれもおらず、ケガ人や死者は一人も出なかつた。空襲は部落に大きな被害を与えた。

◆部落の生活

網取での暮らしは、自給自足の生活だった。わが家ではイモはあまりなかつたが、お米を作つてるので食糧は割合とあつた。お米は糊にして防空壕の中に保管した。当時、部落には精米する機械がなかつたので、お米は小さな部屋で臼でついて白米にして食べた。

満慶じいさんは海に出て魚を捕つたり、山に入つて猪を捕獲して來た。おかげは、料理した魚や猪の肉だつた。じいさんは、よく山に入つて猪を捕つて來たが、家では猪猟に連れて行く狛犬を五頭ほど飼育していた。

私の家では防空壕にお米などを貯蔵していたこともあり、食べることにはあまり苦労しなかつた。それで食糧難を感じ

なかつた。お米を炊いてお粥を作つたりしたが、それを周囲の人たちに分け与えたりしたこと也有つた。イモは少しあつたので、お米と混ぜてお粥を作つたり、カンダバーを食材に、おつゆを作つたりした。

野菜は現在のように豊富ではなく、カングダバーとかエンサイなどがあつた。また、雨後に地面にできるジーフラ（ジュズモ）やキノコを食べたりしていた。キノコは近くの山にたくさん生えていた。じいさんは木の種類によつて、生えるキノコを見分けることのできるキノコ取りの名人だつた。食料は海の幸、山の幸があつて不自由はしなかつた。

満慶じいさんが捕つて來た猪や魚を隣近所に分配したこともあつた。じいさんが猪を捕獲して來た時には、じいさんの手伝いをしながら、「今日はウムザー（猪）のおつゆがあるから食べに来て」と隣に住むおじさんやおばさんに呼び掛けた。すると、隣の人たちはご飯を持って来て、猪汁とご飯を食べながら皆と一緒に楽しみながら食事をした。

満慶じいさんはお酒も作った。お酒の

醸造許可はすでに取得していて、お酒は小さな小屋でひっそりと作った。部落には穂の長い在来米があり、このお米を原料にお酒のほか、栽培していた麦や大豆も加えて味噌や醤油も作った。部落の人たちは、味噌や醤油の作り方を習って共同で作業を進めた。

部落には青年団があつたが、空襲のない時、潮時を見て、「蛸でも捕りに行こう」と仲間二、三人と一緒に舟を漕いで鹿川まで出掛けたこともあった。まずウダラ川を舟でさかのぼり、山を越えて鹿川まで行った。

午前八時頃に網取を出発すると、半時

間ほどかかってウダラ川の上流にたどり着き、四〇分ほど歩いて山越えをして鹿川に着いた。鹿川に着くと蛸やアサリなどを取って食べたりした。これは楽しみの遠足だったが、空襲になると行くことができなかつた。

軍は部落で収穫された米を供出米として持ち出した。軍は収穫したお米の何割かを供出させた。ヒサばあさんは糊を詰

める俵を作らされた。満慶じいさんは、「軍にお米を出すと、自分たちは何を食べるのか」と不満を漏らしていた。

◆終戦を迎える

軍の奉仕作業、自給自足の生活をしているうちに戦争は終わつた。田んぼから家に帰つて来ると、「戦争は終わつたよ」と部落の人たちが話しているのを聞いて、

終戦を知つた。「戦争が終わつた」ということを耳にした時、「これからは何もない。飛行機も来ない。空襲もない」と晴ればれとした気分になつた。だが、これまでには飛行機の爆音が少しでも聞こえると怖かった。

(現住所) 石垣市字新川二四七一二
(出身地) 網取

(当時) 一八歳 家事手伝い

(採録)

なつた。

歴史に「もしも」ということはないが、もし戦争がなかつたら私はどんな人生を歩んでいたのだろうか。学校にも行くことができたと思う。馬鹿な戦争に腹のたつこともある。戦争は青春を奪つた。今、思うと青年学校さえも行けなかつたことが残念でならない。

(現住所) 石垣市字新川二四七一二
(出身地) 網取
(当時) 一八歳 家事手伝い
(採録)

終戦になつたことで目の前が明るくなり、妙に落ち着いた気持ちになつた。周辺が静かになつた心持しがした。何かのんびりしたような気持ちになつた。見えなかつた太陽の陽射しが差し込んできたような感じがした。これまででは空襲に脅え、黒々とした雲が頭上を被つて重苦しい雰囲気だったが、戦争が終わつたということでさっぱりした、とてもいい気持ちに

挺身隊としての辛い体験

新 盛 良 政

◆飛行場造りに動員

私は昭和一九年三月二十四日に県立八重山農学校を卒業した。卒業すると飛行場建設に駆り出された。

作業はダイナマイトを用いての仕事で穴掘りが大変だった。

ダイナマイトを爆発させる時、真管や火薬は当日の分だけ準備して作業を行ない、真管は一つの穴に二、三本入れて仕事を進めた。導火糸は周り糸を取り、作業服の修理にも使用した。危険な作業だったが、道糸に火をつけてダイナマイトを爆発させた。その作業は何日間続いたのかは知らない。

石垣島で飛行場建設などの作業をしていると、昭和一九年一二月代用教員として波照間国民学校に勤務することになった。それは当時の識名信升校長から「ぜひとも来てくれ」という誘いがあったからだった。給料はその時、本給四〇円、

手当て一〇円、さらに臨時手当て四円の合計五四円であった。学校では六年生の担任になった。その後、何日間ぐらいい教員をしたのか定かではないが、学校は戦時色に染まっていた。米軍は沖縄の近海に近づいており、軍命により疎開ということになった。

◆島の初空襲

八重山では昭和一九年一〇月一二日に初めて空襲があった。波照間島も空襲に見舞われた。島での最初の空襲は、昭和二〇年一月二一日で、この時、野原家が全焼した。高倉も三棟焼けた。空襲のあつた日は、ちょうど休日の日曜日だったので、畠の農作業に出ていた。親父は牛を買って農作業をしていた。作業をしていくと、米軍機が飛んできて機銃掃射を仕かけてきた。しかし、親父はそれが空襲だと知らなかつた。

私は石垣島にいた時、空襲の様子を見ているので米軍の機銃掃射を「空襲だ」と言って親父に伝えた。石垣島では現在の公設市場のある場所に防空壕を掘つて、島はこれからが大変だった。昭和二〇年二月五日に第二回目の空襲があつた。米軍機が飛来すると、学校は授業どころではなく、米軍機から逃れることに必死だった。教員は逃げ場所を求めて桃盛家の防空壕に駆け込んだ。学校では空襲が激しくなると、石垣を積んで防空壕を造

いる時、兵隊と一緒にいて初めて空襲に遭つた。

空襲の被害は畑作業から戻つて来ると分かった。野原家は全焼しているし、高倉も焼けて部落では大騒動になっていた。住民は初めての空襲に右往左往して慌ており、島全体が非常事態になつた感じだつた。空襲に見舞われると西表島に疎開する話が出てきた。島にはカツオ船があり船員もいた。

疎開の話が出ると、避難小屋造りに第一陣が西表島に渡つていて作業を終えて島に戻つて来た。作業隊が帰つて来ると、島は空襲の被害を受けていた。学校にも機銃掃射があり、校舎に弾丸が打ち込まれた。私の机にも機銃が打ち込まれていた。

り、避難場所に当たった。

◆西表島に疎開

戦争が激しさを増してくると、先生方は自分の郷里に帰った。教員が不在だと学校は機能しない。島の人たちは空襲の中を西表島に避難小屋造りに行つた。避難小屋造りに西表島に渡つた第一陣は小屋を造つて島に戻つて来たが、その後に前部落の私たちの班では私の家族と親戚の新盛家人、それに小成家人を含め四人ほどで疎開地に渡つた。それは南風見に避難小屋を造ることだった。西表島に渡ると、島に帰つて来ることはなかつた。

住民の疎開は、私たちの後に続いた。疎開は早朝に鹿川に渡り、夕方になって南風見にたどり着いた。鹿川は平地が少なく、山岳が海に落ち込んでいるため、上空から地上の様子が見にくく地形になつてゐる。そうなると米軍機は山岳が飛行の邪魔になり、低空ができないので機銃掃射ができず、われわれは機銃に撃たれる心配はなかった。

島には當時、カツオ船が六、七隻ほどいた。その中に豊福丸と昭洋丸がいた。米軍機が飛来してもカツオ船には何ら影響はなかつた。疎開の時、一端、鹿川に渡つたが一日中、鹿川にいることはできなかつた。疎開場所は南風見だった。そこで鹿川から南風見に行くことになったが、南風見への道筋が分からぬ。山中を歩くことができないので、海に下りて南風見まで歩いてきた事もあつた。

◆挺身隊を組織

疎開地で生活していると、挺身隊といふものを組織することになった。しかし、隊員の人数や作った時期ははつきり分からぬ。挺身隊は建物を造つて活動の拠点とした。建物の中には土間があり、両側は竹編床の構造になつてゐた。土間にはドラム缶を用いて火を焚き、蚊よけにした。建物の中は二つに仕切り、片方に男性、もう片方には女性の部屋を造り、挺身隊員はそこで寝泊りしていた。疎開地には挺身隊の小屋があつた。挺身隊を組織したのは山下虎雄で、活動は全て彼の指導の下で繰り広げられた。

挺身隊は昭和二年生、三年生、四年生の若い男女で構成されており、同隊では私が最も先輩だった。私より上の人们は徴兵検査で軍隊に召集されていた。女性には西里スミさんもいた。隊員にはどんな人たちがいたのか、戦後五〇年も経過しているのではつきりと覚えていない。挺身隊は組織されたものの、決った仕事があるわけではなかつた。食糧を運ぶ輸送船が疎開地に入つてくると、朝から荷卸しをするとか、そのような仕事をしていた。疎開地では全て同じだった。食べ物、寝泊りする避難小屋の造りも同じだった。疎開地での一日の生活は、米軍機が来ないうちに朝早く炊事をして食事を取ることから始まつた。夜間に米軍機が飛来することは滅多になかつた。

疎開地の前には海が広がつてゐるが、上空には米軍機が飛んでおり、機銃掃射を受けるため、危険で海に出て魚などを捕る事はできなかつた。山下の指導は厳しかつた。しかし、彼は青年学校の指導員として赴任して、学校では私と一緒に

時もあったので、それほど厳しい事はなかった。だが、これが通用しないこともあった。

このようなことが一度あった。早朝、荷物を下ろす時のことだった。その時、新米を炊いて船影で山下に見られないようになっていた。そこを彼に見付かってしまった。そうすると、「来い」と命令し、私は船から下りて彼の所に行くとパイプで殴られた。私は彼に「船員たちが食べなさい」と言わされたので食べたということを話した。その時、他の人たちは仕事をしていた。だが私は仕事をせずに、山下の目を盗んでご飯を食べていた。そのことが彼の怒りを買ったらしい。山下の行動には理解しがたいことがあり、彼に殴られた人はかなりいた。山下は人を殴るほか、けつ飛ばしたりすることもあった。

挺身隊が組織される前に山下の命令により若者は夕方、海浜に長時間膝まづきをさせられることがあった。私は「こんなことはいけない」と思い、「お腹が痛い」と言うと、「伏せておれ」と言われ、

うつ伏せになった。当時、大勢の若者がいた。薄い暗くなつた夕方、海浜に膝まづきをさせられると足は痛いし、小便をもよおすこともしばしばあった。そこで「小便に行かせて」と頼み込むと、「こつちでやれ」と言われた。

挺身隊は最初の頃、多くの若者で作られたが、活動を続けるうちに人選をした。山下は挺身隊をわざわざ組織したもの、人選によって徐々に人数を減らし、僅かの人員で活動を開拓した。その理由は分からぬ。

◆挺身隊の活動

私が挺身隊にいた頃、西表島の西部に護郷隊がいて、そこには島の出身者が六人いた。新城清吉さん、前迎登さん、山田均さん、南風本肇さん、慶田盛光次さん、仲底正雄さんで、彼らは祖納を拠点に山中でのゲリラ戦に備えていた。全て大正ひと桁生れの年輩の人たちだった。

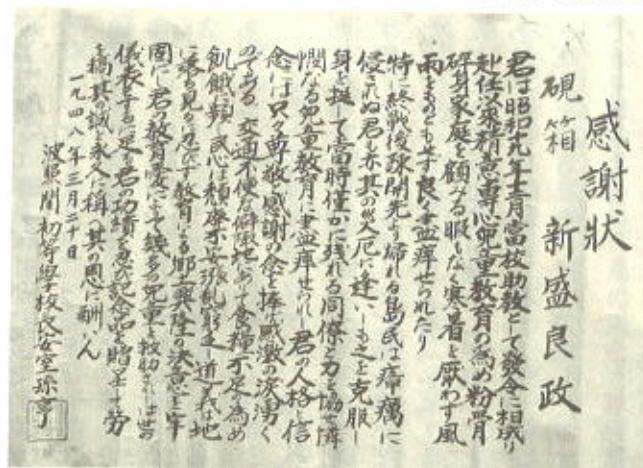
挺身隊はある時、山下の命令を受けて祖納に行かされたことがあった。私は当時、まだ西表島を歩いたことはなかったが、南風見から祖納に書類を持って行くように指示された。書類の中身は何か分からなかつた。祖納に行つたのは私と白保さん、嘉良さんの三人だつた。われわれは南風見から由布島まで歩き、由布島で一泊をして祖納を目指した。由布島には島から何人か疎開した人がいた。一泊すると今度は由布島を出発し、目的地の祖納まで島を北回りして歩いた。島の周辺は入り江があつて広いが、時には着物を外し、それを頭の上に乗せて進むこともあった。

南風見を出発して二日目になると、宇多良までたどり着いた。宇多良では渡し舟が必要となり、宇多良川沿いの宇多良炭鉱に行き、そこから対岸に渡つた。徒步で難儀をしながら祖納に着いたが、その夜は兵隊が寝泊りする部屋で波照間島の人と一緒に泊まつた。翌朝は南風本肇さんが小浜島に牛を連れていくという事で、私たちも彼について行つた。そうすると今度は渡し舟がなかつた。仕方がないで着物を脱ぎ、着物を頭上に乗せて川を泳いで渡つた。帰路の時は由布島に

泊まつた。

祖納までの往復は結局、四日間かかっただ。山下から預かった書類は、護郷隊の本部に持つていった。祖納にあった護郷

感謝状 親 箱 新 盛 良 政



波照間初等学校から贈られた感謝状

山下は夜になると西島本の人たちと一緒に由布島に泊まっていた。山下はそれで西島本の人たちと親密な関係になつたと思う。山下は南風見にいる時には挺身隊の小屋で寝起きしていた。特筆すべきことだが、彼は絶対に船の上で眠ることはなかつた。仮に彼が船上で寝ていると、彼を殺そとたくらんでいる人たちから、海中に落とされるということを彼は察知していたからかも知れない。寝る時は必ず陸上だつた。このようなこともあつた。ある時、麻袋の布を体に巻き付けて疎開地に來ていた台湾の人を切り殺したといふ話も聞いた。また龜浜巡査を殴つた事もあつた、といふことも耳にした。

波照間国民学校の同僚だった上里真昭さんの場合は食糧を確保する人がいるため、ずっと教員を続ける事ができたと思う。しかし、私の場合は親が死んでどうすることもできず、教員を続けることができなかつた。食糧難な過酷なマラリア地獄の中で、私は教員を辞めざるを得なかつたが、戦前に教員をしていたこともあり、昭和二三年に当時の波照間初等学校の安室孫亨校長から感謝状をもらつた。(現住所)竹富町字波照間二八四三番地(出身地)波照間島

(当時)一八歳 挺身隊

(採録)

もない中でソテツを切り、そして卸して食糧に当てた。当時はまず食糧を確保することが何よりも大事だつた。

学校の教員をしていると、食糧の確保が自由にできなかつた。私の家は家族が少ないため、ソテツを切つて食事を家族に食べさせる人がおらず、それは私しかできなかつた。

隊の本部には今村隊長がいた。われわれは今村隊長と一緒に夜を徹して話をした。そして書類を手渡して南風見に戻つて来た。

われわれは南風見に寝泊りしていたが、

◆疎開地からの引き揚げ

疎開地の南風見から島への引き揚げは昭和二〇年の八月頃だつたと記憶しているが、引き揚げた時期は私が最も遅かつた。私は疎開地でマラリアにからなかつたが、島に帰つて来てからかかつたが、当時は何しろ食糧不足だつた。何

《写真に見るわが町》

漁民の村



上空から撮影した細崎の集落

小浜島の西方、突端に位置する細崎。「クマンサキ」「クバザキ」の呼称があり、北、南部落からなる「上の集落」とは歴史的に血縁関係など全くなく、集落は明治末期に自由入植した糸満や本土の人たちによって創設された。島の周辺海域には魚の餌となる、稚魚が多かったこともあり、村の創設にかかわった人たちは漁業入植として、水産業に従事した。

村は古くから漁業の発進基地となり、大正七年（一九二八年）頃からカツオ工場が建ち、最盛期には工場の数は十三にも達した。写真集『望郷沖縄』第三巻には坂田安次郎が営んだ八重山鰯節製造所の様子が収録されている。坂田氏は和歌山県の出身で、八重山を開発した一人として知られ、各種事業に取り組んだ。中でも鰯節製造には尽力し、水産業の振興に力を注いだ。

八重山で新聞の先駆けとなった『先島新聞』の大正七年六月五日付け紙面によると、当時、小浜島には三隻のカツオ漁船がいたことが分かる。第三大漁丸（坂田安次郎）、恵比須丸（濱崎莊市）、玉福丸（玉城三良）の船名が見える。

写真は細崎の集落を一九三二年（昭和八年）に撮ったもの。遠くに建つ円筒型の構造物は煙突であろうか。港には二隻のカツオ漁船が停泊している。

（通事孝作）

△新聞で知る町の今昔

國立南風見診療所

（二）
國立南風見診療所實現

新城字民は喜んで移住

本年（昭和十六年）には沖縄県営開墾事業計画により再び、新城島からの移住者と合流して開拓事業が展開された。

地鎮祭及び起工式は、同年三月十一日に挙行された。地鎮祭では山田武三村長が祝辭を述べた。八重山郡振興期成会の大濱用立会長は「移住民が眞に感謝報恩の生活をなし、本事業を成功せしめ将来、その地帯が開発され、一村を形成する時あれば、よろしく淵上村を建設すべし」と事業着手を祝った。沖縄県営開墾事務局南風見出張所長には佐藤氏が就任した。

（海南時報）の昭和十六年三月十四日付け紙面によると、県営南風見開墾事業は事業費六十三万円と国庫補助金三十七万六百円を投入して実施。昭和十六年から二十年までの四カ年計画で百五十世帯を移住させ、健全な自作農創設と産業組合を中心とした近代的な模範農村を目指して、事業実施に伴い、学校、マラリア防護所、共同浴場、簡易水道、神社、共

沖縄県振興計画に基づいて、新城島の民十七世帯が仲間川の南部一帯に移住し、新天地に夢を託した。三年後の一九四年（同十六年）には沖縄県営開墾事業計画により再び、新城島からの移住者と合流して開拓事業が展開された。

同製糖所の設置、運搬船の建造などが見込まれていた。

國立南風見診療所は、開墾事務所の設置に付随して一九四三年（同十七年）に設置された。診療はマラリア撲滅事業の強化や一般疾病などを対象にした。『海南時報』の昭和十七年四月十七日付け紙面には「國立南風見診療所實現」との見出しで「県営南風見開墾事業は着々進捗し、県では移住者の医療施設整備を急ぎ、マラリアの防護陣完備に鋭意努力してき

たが、愈々國立南風見診療所の建物並に職員の決定をみた。所長事務扱いは西郷衛生課長で医学博士、吉野高善氏が嘱託医として診療所に勤めることになり、技手高嶺方員氏、県雇浦崎賢益氏、看護婦石垣末氏が発令された」とある。所長は、その後、千原成悟氏が任命された。

南風見診療所が開所した当時は、すでに太平洋戦争が勃発しており、一九四五年（同二十年）になると、新興集落の大原は米軍機による、激しい空襲に見舞われた。赤瓦屋根の建物だった診療所は爆弾投下により、跡形もなく吹き飛んだ。西表島東部では戦前、南風見開墾が行われた。一九三八年（昭和十三年）には産業基盤の整備と生产力の増強を狙つた

《戦跡をたずねて》

国吉家の機銃弾跡

竹富島には戦時中、独立歩兵三〇一大隊（阿部繁大尉）第一中隊（大石喬隊長）が駐屯した。一九四四年（昭和十九年）



ヒンブンに痕跡をとどめる機銃弾跡

十二月十七日から竹富国民学校を兵舎に構え、米軍との戦闘に備えた。第一中隊は三小隊で形成されていた。

『八重山兵团防衛戦闘覚書』によると、宮崎旅団の防衛方針は「主力を以って石垣島に堅固なる陣地を構築して飛行軍団の戦闘に協力すると共に、敵の攻撃を破壊して其飛行場の利用、設定を最後まで許さざる」ことにあった。石垣島の前方南に浮かぶ竹富島を、日本軍は米軍の石

垣島攻略の前進基地になると見込んでいたようである。島の南東海岸沿いには米軍の上陸に備えて銃眼が掘られている。

八重山では昭和十九年十月十二日に石垣島が初空襲に見舞われたが、それ以降、各島じまでも米軍機による機銃掃射や爆弾投下があった。竹富島も例外ではなかった。住民の証言によると、石垣島と竹富島の間の海上には、日本軍の輸送船などが停泊していたという。

米軍機は輸送船などに寄襲攻撃を加えたが、日本軍はこれに対して於茂登岳の麓に設置した高射砲で応戦した。この時、米軍機に撃ち外れた砲弾が、竹富島の上

空で炸裂し、その破片が島に落下して住民は恐ろしい思いをした。砲弾の破片が弾薬庫として使用していた茅ぶき屋根の空家に落ちて、煙がくすぶり続けることであった。幸い住民の懸命な消火活動によって、燃え上ることはなく、大事には至らなかつた。

島の各家庭では防空壕を掘り、空襲の時には逃げ込む避難場所とした。竹富国民学校の校舎は米軍機の空襲によって一部破壊された。民家も被害を受けた。竹富三八三番地の国吉家もその一つだった。国吉家は石積みで屋敷囲いされ、ヒンブンが赤瓦屋根の母家の前に立つ。ヒンブンは母家を目隠しする役目を果たし、コンクリート製だつたり、石積みだつたり多種多様である。

国吉家のヒンブンは、コンクリート製で幅十五・五釐、高さ百五十五釐ほどの大きさ。被弾跡は地面から約八十釐の所に、直径十二釐の大きさの穴が貫通し痕跡をとどめている。砲弾は表門から、屋敷に向かってロケット弾が撃ち込まれたのではなかろうか、と推測する人もいる。

《聖地めぐり》

南神山御嶽

黒島の公儀御嶽のひとつ。パイハメマワンと呼ぶ。『琉球国由来記』に掲載されており、古くから航海安全を祈る霊地



航海神をまつる御嶽

として、住民から崇められてきた。御嶽の由来をひも解くと、「おなり神」と深くかかわっていることが分かる。「おなり神」とは、兄弟を守護する姉妹の靈のことだが、『おもうさうし』に「おなり神」に関する句がある。「くのみぢへりきよが、みぢよりきよがふなやれ、神やおなり神、ころはいえけり」がそれだ。

「村落の神女である、みぢへりきよが、祝福する航海守護神はおなり神、渡海するには善き兄弟」と解釈されよう。

御嶽は、兄弟の危難に対し姉妹が靈的庇護を發揮し、その祈りが兄弟に通じたことにより、旅御嶽の聖地になったことが伝承として残る。御嶽には銅製で裏面に渦巻き模様の入った三宝鏡の神体があり、また完全ではないが、絹に白装束もあるという。

『琉球国由来記』によると、神名「阿宇慶山」、イビ名「ヲトウソイ大神」と記す。場所は黒島村である。御嶽の宗家であるトゥニムトゥは崎原家。年代不明だが島には古い時代に、十数余の小さな村が散在していたと伝わる。村に関連す

る御嶽もある。

数ある村の中に、崎原大主の支配する「サキバル村」があり、大主は南神山御嶽を祈願するために、通つたらしいと古老は語る。トゥニムトゥが崎原家であるのは、崎原大主と関係がありそうだ。しかし、神司の出自は崎原家から東筋家に移った。

神司は現在、又吉立子さんが務める。

又吉さんは東筋家の娘で、昭和四十八年に沖縄本島に転居したが、祖母である先代の神司・大舛モウシとともに神行事の時には御嶽に通った。その後、大舛さんがインクヨイ（神司の引退式）をし、昭和五十六年にはシギウルヨイ（神司の繼承式）をして、又吉さんは正式に神司職を受け継いだ。神司は三代前まで遡ることができる。大舛さんの前は東筋マイツ、そして、その前は東筋カマドとなっていた。

道路から拝殿までは曲線道で、分かりにくいため、道路に面した場所に第一鳥居、さらに奥に入った所に第二鳥居が建つ。嶽域は神々しさを漂わせる。

《文化財探訪》

下田原城跡

本町の最南端に位置する波照間島は、

る。十五世紀中期から十六世紀初期にかけての八重山群雄割拠時代の英雄、オヤケアカハチ、長田大主を輩出した島としても注目される。

下田原遺跡は、島の北海岸より約五百メートル内陸部に立地する。高さ約二十メートルの西北向きの急峻な断崖を利用して構築され、地形は北側と西側は急勾配を形成し、南側は緩やかな傾斜になっている。城跡に立つと北方に西表島の島影を眺望することができる。

城跡の規模は東西約二百メートル、南北約百五十メートルの広さで、琉球石灰岩の自然石が乱石状に野づら石積みされている。城跡内は全て通用門で結ばれ、物見台、兵器庫、各郭を区画する門後群、井戸などの遺構が残っている。

城跡の保存状態は良好で、起伏に富んだ石積みが曲線を描いて郭を形づくっている。昭和六十一、六十二年に県教育委員会が実地測量を行なったが、調査の結果、城跡の範囲は五万二千五百平方メートルに及ぶことが分かった。城跡内の表面採集で十五、六世紀頃の輸入陶磁器や鍛冶工



石積み囲いが残る城跡

房の存在を示すフイゴの羽口片、鉄滓（てっさい）などの遺物が検出された。城跡を外観し、立地条件を考慮すると外敵と闘うために築かれた城（グスク）のようだ。出土した遺物から十五～十六世紀の機能した城であることは明白。構造上から戦闘に備えた要塞のように思える。

八重山は当時、波照間島のほかに石垣島、西表島、与那国島に豪傑が霸権を競う群雄割拠の時代だった。一五〇〇年にはオヤケアカハチが琉球王府に反旗を翻し対決したが、結局、征討軍との激戦の末に敗れ去った。下田原城跡は石垣島の大浜にあるフルスト原遺跡と構造的に類似しているが、城主はだれだったのか、現在のところ不明だ。

下田原城跡は、琉球王府が奄美大島から八重山群島に及ぶ地域を版図統一する歴史的変動の過程の重要なグスクとして評価される。国の文化財審議会は昭和六十三年十月二十八日、文部大臣に国指定の史跡にするように答申した。しかし、未だ文化財指定を受けていない。

八重山最古の遺跡、下田原貝塚を抱えるなど、歴史的に由緒ある島として知られ

中城村史編集委員会	中城村史 第一巻 通史編	石垣市総務部市史編集室	〃 一野底の歴史・史跡・地名・生活 -
本部町史編集委員会	本部町史 通史編 上	沖縄国際大学南島文化研究所	南島文化研究所要覧
"	"	高 良 倉 吉	地理 - 特集 八重山島の社会を考える
名護市教育委員会	別冊資料	橋 本 寿 資	琉球辞令書の一覧表と収集現況
飛行第五八船隊三中隊	字誌づくり入門	高 良 倉 吉	沖縄県地域史協議会誌
戦友会(編)坂本鶴男	われら戦いの記	橋 本 寿 資	沖縄県地域史協議会誌
宜野湾市教育委員会	ぎのわんの西海岸	新川が語る沖縄戦	沖縄県地域史協議会誌
宜野湾市教育委員会文化課	野嵩マールアシビ 組踊 宜野湾敵討	新川が語る沖縄戦	沖縄県地域史協議会誌
名護市史編さん室	「教育史」関係新聞記事目録 戦前編	西原町勢要覧	沖縄県地域史協議会誌
"	名護・山原の歌謡目録	沖縄大学地域研究所「年報」	沖縄県地域史協議会誌
大城将保	琉球政府	那覇市議会事務局議会	沖縄県立芸術大学紀要
運営委員会	新沖縄フォーラム編集 けーし風	沖縄県立芸術大学	沖縄県立芸術大学紀要
今帰仁村教育委員会	写真にみる今帰仁	那覇市議会事務局議会	那覇市議会史関係略年表
今帰仁村歴史文化センター	ームラ・シマの風景・人々・生活 -	沖縄県立芸術大学	沖縄県立芸術大学紀要
宮城正勝	おきなわ・行事・イベントオールガイド	沖縄県立芸術大学	沖縄県立芸術大学紀要
大中誌編纂委員会	大中誌	沖縄県立芸術大学	沖縄県立芸術大学紀要
白保小学校百周年記念実行委員会	白保教育風土記	沖縄県立芸術大学	沖縄県立芸術大学紀要
波照間小学校創立百周年記念事業期成会	「波の子」	沖縄県立芸術大学	沖縄県立芸術大学紀要
石垣市総務部市史編集室	村むら探訪 - 伊原間の歴史・史跡・地名・生活 -	沖縄県立芸術大学	沖縄県立芸術大学紀要
仲宗根将二	コリネリウス・アウエハント	沖縄県立芸術大学	沖縄県立芸術大学紀要
HATERUMA		沖縄県立芸術大学	沖縄県立芸術大学紀要

—南琉球島興文化の社会と宗教—

喜納政彦

読谷村史編集委員会

読谷村史 第四巻資料編三 読谷の民俗

下

沖縄県立図書館史料編集室

沖縄県史 資料編I (原文編)
(通訳文)

並里公民館内
並里区誌編さんだより

八重山開拓移民

那覇女性史編集委員会

沖縄芸術の科学 第八号

多良間村教育委員会
島びとの硝煙記録

「沖縄・戦後五十年の歩み」編集委員会

なは女性史証言集

斜里町立知床博物館
斜里岳の自然

沖縄・戦後五十年の歩み

戦後五十年の歩み

沖縄県立図書館八重山分館
こんろんか —図書館だより—

久米島総合調査報告書

多良間島民話

沖縄県史研究紀要
斜里岳の自然

沖縄国際大学南島文化研究所

大浜の民話

沖縄県史研究紀要
沖縄のお友達へ

沖縄国際大学遠藤研究室

歴史手帖

北谷町教育委員会
北谷町の拝所

白鳥聰

平和への道しるべ

北谷町の遺跡
金良宗邦文書

白梅同窓会

あなたの努力が報われるきび価格

与那原町教育委員会
ムギメシヒトツココフタツ

沖縄県糖業振興協会

インヌミから五十年目の証言

町田市企画部企画調整課
戦争体験記 あのころ

沖縄市企画部平和文化振興課

こんろんか —第一二十六号—

与那原町議会
ふたたびくりかえすまい

沖縄県立図書館八重山分館

こんろんか —第二二十七号—

町田市
与那原町議会
ふたたびくりかえすまい

豊見城村史編さん室

豊見城村史だより

与那原町議会
町議会四五年のあゆみ

大沢夕志・啓子

オオコウモリの飛ぶ島

有老舗恵命堂
生命の島

石垣市立八重山博物館

絵が語る 明治の八重山

並里区事務所
新聞集成

やえやま幼稚園創立五
十周年記念事業期成会

土木建築行政の五十年

沖縄県土木建築部技術管理室

業務日誌

(二十五日まで、職員一人)

四月二十五日

- ・町史編集室資料収集のため、大原へ日帰り出張。(職員一人)

四月三十日

- ・「戦争体験記録」生原稿送付。(六回)

◆一九九六年(平成八年)
三月十八日

- ・「竹富町史だより」九号、八島印刷と請負契約。

四月一日

- ・嘱託員、通事孝作、契約更新。

四月四日

- ・町史編集室定例会議、平成八年度事業計画及び四月業務予定検討。

四月五日

- ・「戦争体験記録」生原稿送付。(五回)

四月十日

- ・町史編集室臨時会議、区長会議に向けての資料検討。

四月十二日

- ・町史編集室臨時会議、町史編集室の業務説明。

四月十五日

- ・「戦争体験記録」初校、(株)南西印刷から届く。(一回)

四月十六日

- ・戦災実態調査及び町史編集室資料収集のため、竹富島へ出張。(十七日まで、職員一人)

四月二十三日

- ・戦災実態調査及び町史編集室資料収集のため、小浜島へ出張。

五月一日

- ・「戦争体験記録」初校、(株)南西印刷から届く。

五月二日

- ・沖縄県地域史協議会総会及び研修会、資料収集のため、那覇市へ出張。(六月一日まで、職員一人)

五月三日

- ・「戦争体験記録」生原稿送付。(七回)

五月二十日

- ・崎山直氏(元石垣市史編集室長)から『旅と伝説』本巻三十二冊、別巻一冊、受贈。

五月九日

- ・臨時職員(用人)に小濱啓由、採用。

五月八日

- ・町史編集室定例会議、六月業務予定検討。

六月十一日

- ・「戦争体験記録」生原稿送付。

六月二十六日

- ・戦災実態調査及び町史編集室資料収集のため、黒島へ日帰り出張。（職員一人）

六月二十七日

- ・「戦争体験記録」の印刷業者・株南西印刷との編集打ち合わせ及び沖縄県立博物館の波照間総合調査会議のため、那覇市で出張。（二十八日まで、職員一人）

七月一日

- ・町史編集室定例会議、七月業務予定検討。

七月十日

- ・戦災実態調査及び町史編集室資料収集のため、祖納へ日帰り出張。（職員一人）

七月十二日

- ・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、波照間島へ日帰り出張。（職員一人）

七月十八日

- ・臨時職員（用人）に平良みゆき、採用。

・「戦争体験記録」生原稿送付。（九回）

七月三十日

- ・「戦争体験記録」編集に向けて昭和十九年、二十年当時の小浜島の集落地図作成のため、根本宏佑氏から聞き取り調査。

八月二日

・図書備品購入契約、(有)沖縄出版と締結（一冊）。

八月六日

- ・「戦争体験記録」生原稿送付。（十回）

・戦災実態調査及び町史編集室資料収集のため、祖納へ日帰り出張。（職員一人）

八月十三日

- ・戦災実態調査及び町史編集室資料収集のため、黒島へ日帰り出張。（職員一人）

八月十六日

- ・「戦争体験記録」生原稿送付。（第十一回）

八月二十一日

- ・「戦争体験記録」戦争体験記、初校送付。（一回、竹富島）

九月二日

- ・町史編集室定例会議、九月業務予定検討。

九月八日

- ・第四十回市町村新採用職員研修のため、通事孝作、那覇市へ出張。（十三日まで）

九月九日

- ・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、黒島へ日帰り出張。（職員一人）

九月十二日

- ・戦災実態調査及び資料収集のため、白浜へ出張。（職員一人）

日帰り、一人十三日まで

編集後記

◆『竹富町史だより』第十号を発刊しました。今号は、前号に続き、「戦さ場の実相」に三本の証言記録を盛り込みました。体験記録を読むと、各年代ごとに、それぞれ役割があつたことが分かります。学校施設の教室で正規の授業を受けることなく、露天で授業らしい授業を受けざるを得なかつた嘉弥真さんの体験には、戦争が教育も含めて全てを失わせる怖さを感じさせます。

◆連載シリーズの「写真に見るわが町」「新聞で知る町の今昔」「戦跡をたずねて」などは、島じまの歴史を浮き彫りにさせてくれます。その中の「新聞で知る町の今昔」には国立南風見診療所を取り上げましたが、建設直後と思われる赤瓦屋根の診療所の写真が残っています。その写真は現在、町史編集室で保存しています。

(通事)



竹富町史だより 第10号

平成8年9月30日 発行

編集発行 竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

☎ 09808-2-9985

印 刷 八 島 印 刷